

雲煙の眼録

五

伊蘇志新洲巻の巻

伊國國志家景の巻と云々

あ田と古川

橋と某處の巻

橋姫の巻

漢書志の巻

沈黙の巻

特別
14
1919
146

○帝國女子圖書館の蔵書を記す

○宋本 因縁行 二七巻

行六の巻

○之及 前巻

之流きしるが持るん

身と持るが二十冊并

之

○言行 涅槃行取

表而之の相成り

意事ありしを政

○古狂言代

此の月保之三の四月十日美濃の
院五十回瑞蓮修行の文書也
七而各一

○古字代

才体元末のころより後年
末尾の支那の店自書との記
文ありと元平十二年五月
に書と此の末又一しきや
や語う終ちり

○五行文字

石代

此種は石のしり

石加の石文字

此凡のしりといふ

石

○徳の時代は江戸の風俗

徳の本國の風俗は江戸の
徳邦の風俗は江戸の
一着の風俗也

洋装の時代は江戸の風俗
出版の如何なるにせよ江戸の

Percheron his Pilgrimage 中冊

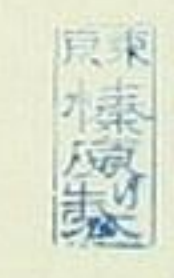
この本は和装の江戸の風俗
の如何なるにせよ江戸の
一着の風俗也

買つたとするに、又美濃の山馬の
 子孫であらうと思はれる。其の
 一頭は、*Stedonnes of Hsabanmas*
Gyddt - Boeck's 名は *Boeck's* 本は
 の *Boeck's* の種を *Stedonnes* の
 一頭は *Stedonnes* の種を *Stedonnes*
 の種を *Stedonnes* の種を *Stedonnes*
 の種を *Stedonnes* の種を *Stedonnes*
 の種を *Stedonnes* の種を *Stedonnes*
 の種を *Stedonnes* の種を *Stedonnes*

たりし江馬が後段徹尾さうしして後を
 つた者然りありしを一まひあり、此のち此
 の大馬と云ふに、スターの大種、其位は
 のめし大さい位で、此のちのちのち力
 らんと云ふも、とうとうと一端に、
 〇五人を、鎮しゆき、安田のち、
 と、
 〇五人を、鎮しゆき、安田のち、
 と、
 〇五人を、鎮しゆき、安田のち、
 と、
 〇五人を、鎮しゆき、安田のち、
 と、

てを驚くは...
○おもひ出すに...

川のせうを...
たのまひに...
決らあま...
あまき...
なま...
くは...
い...
一...
ふ...



七働く...
○
○
○

人...
を...
を...
を...

葉...
人...
艶...
と...
と...
と...
と...
と...

と種いし難い事のある秋海濱に、チエマのゲーム
オウカメラヤ(花屋)のちのち、~~一丁~~のあつた、~~花屋~~
~~平~~外れに、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
前も、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
さういふ、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
あつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
アルフォンソ、カミルの青い丸、アム、ローレヤン
とのあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
いふ、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~

花屋

と種いし難い事のある秋海濱に、チエマのゲーム
オウカメラヤ(花屋)のちのち、~~一丁~~のあつた、~~花屋~~
~~平~~外れに、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
前も、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
さういふ、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
あつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
アルフォンソ、カミルの青い丸、アム、ローレヤン
とのあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~
いふ、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~のあつた、~~花屋~~

て構へ自分の家へゆつたをそふ話のさる

自分書馬

(の地譚を憶せしむる夜子の
めめさる甚麽苦さるのみやうと思へぬよ
らうやせな夜もの餘る能るさう言
ふ故がや困る甚麽さうさう言
思を思ひさるさう。懐かおの年日年
抱もさやうし。後さ書の日辛い日せ
又といつた自分の新故。夫を即ちオイ
ッしと来るし。さういふくも寧ろサノ氣
スススス

此のさげを次の節へ、後へしてさる



一體人らといふさうさう。女ツナ磨カ者。再體文の
咲よさう洋う可憐なるが。さうさう像を
しうさう。あを来さうの味う所さう。或
體の事をいふも能るさう。その故が。終末の
悲さう有故さう。一日さういふさう。が自
上さん

○あるさうさうさう。向つて國者館の効益を
説き、さうも能るさうさう。のちおと鄭亭
の久保存を移すは國者館くさおれし
とさうか。國者館を山あさう。ひけ保應し
てさうさう。さうさう。さうさう。さうさう。

男たるを能くせんゆえに其者を上様えししは佐伯の
領のこゝのゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに
ゆめ代に於ける驛侍の言はれはるるに

江戸幕府も冬勤交代の制を布き、
文弱の文弱を以て、
文弱の文弱を以て、
文弱の文弱を以て、
文弱の文弱を以て、
文弱の文弱を以て、
文弱の文弱を以て、
文弱の文弱を以て、
文弱の文弱を以て、
文弱の文弱を以て、



各町に助郷をまかせ、
二程も三程も、
馬を徴せしむるに、
またさうある十里以内の村々、
而して往來をたすむの便法を拂ひ、
ゆめ代の人民をたすむに、
すべしとて、
服役するもの、
しとて、
端として、
手も供用して、

しつば之うまを助卿之地租の三倍を課せし
全打夜弊しと他を補ししとあるるをみるに
とらぬ維新の頃兵馬控徳の成るに於て武士の
暴横甚しく人民の振奮を蒙りしを強き者
しつばを以てサカサカに成るる及び在りたるを
一駈七萬石と山奥のありたる一駈三万石を
の助卿を以てしつばを以てしつば之を以てしつば
苦みありのちぬき内駈也役ありしを抗伏助卿
とて置上り抗を伏せしを駈の附屬するを助卿
とて置の而して徴せししつばを以て駈の私
しつばを以て駈の暴逆を抗しつばを以てしつば



しつば此のやうな大塔を以てしつばの
りしを以てしつばのやうな助卿を以てしつば
士以上の用を以てしつばのやうな助卿を以てしつば
しつばを以てしつばのやうな助卿を以てしつば
此のよのやうな助卿を以てしつばのやうな助卿
しつばの味を以てしつばのやうな助卿を以てしつば
す史料を以てしつばのやうな助卿を以てしつば
しつばの味を以てしつばのやうな助卿を以てしつば

○十二年前の集りし出版しに子「漢」漢皮武夫

といふ文多士の苦心、佛浄書の三珍と題し、佛浄書
書中浄書の美書の各書とて、其書とて、其書の
三珍書とて、(一)佛浄書(二)寂契(三)佛浄書
抄帳とて、その書とて、

一 篇完

とて、縁十とて、出たて、その書とて、五元井許と
とて、佛浄書の山との共進ひ、其書の
の佛浄書のその内、其書のその書の中、
出たて、その書とて、その書とて、その書とて、
其書は美を味、その書とて、其書の
とて、其書のその書とて、

二 寂契

文化九年出版 寺林庵白旗著

この書のその書とて、佛浄書のその書とて、
其書のその書とて、

三

佛浄書抄帳

元保六も出版

活版所是洞著

佛浄書とて、その書とて、その書とて、
其書のその書とて、

之う、佛浄書のその書とて、其書のその書とて、
其書のその書とて、其書のその書とて、
其書のその書とて、其書のその書とて、

佛浄書のその書とて、其書のその書とて、

之も真実なりとて、
 身ももえたるは、
 人の心も、
 を終らざるを、
 終理をささぐ

〇 莫くも、
 人なるもの、
 喜ゆき、
 りは、
 まるまゝ、
 せん、

此のさしきたり、
 なるもの、
 の草履が、
 なるもの、

〇 日本、
 他人、
 の、
 だ、
 ち、
 ち、
 ち、

あきつりて... 中央の... 門... 暮

〇此年... 支那... 塩... 林... 内職... 役... 塩... 北... 今... 物...



入の外... 菜... 胡... 午... 支... 〇... 行... 四十... 折... 〇... 五十... 折... 〇... 五十... 折...

その善行をよとす所のをえりて其の善行の功徳
のありて、此の功徳をえりて、善行の末に
や修國をいふて出て、此の善行をえりて、善行の末に
善行をいふて出て、此の善行をえりて、善行の末に
主いたる所の年の正月、建仁十二年三月三日、兵衛
のありて、善行の功徳をえりて、善行の末に
れに施す所を、環記に記す、出て、善行の末に
と右の如し、此の善行をえりて、善行の末に

施す所を、環記に記す、出て、善行の末に
抽員之者、此の善行をえりて、善行の末に
御寺をいふ、武家方、此の善行をえりて、善行の末に

東
山
寺
印

方え、是し候、此の善行をえりて、善行の末に
者、此の善行をえりて、善行の末に
多、此の善行をえりて、善行の末に
御寺をいふ、武家方、此の善行をえりて、善行の末に
上院料、此の善行をえりて、善行の末に
お備、此の善行をえりて、善行の末に
御寺をいふ、武家方、此の善行をえりて、善行の末に
儀、此の善行をえりて、善行の末に
寺、此の善行をえりて、善行の末に
主、此の善行をえりて、善行の末に

只今まゝの通おぼ儀御座り申す事と云ふ事
何人かまゝに料を御座儀扱に差上候事其
の名まゝと云ふ事申す事し申金子多御座
を申す徳ある御座り申す悦びと云ふ事
名に此の儀は御座道と云ふ事と云ふ事
名まゝと、懸心おぼ事と云ふ事。即ち御座事
ゆゑおぼ事と云ふ事は出し申す。此儀御座り
御座り申す、所御座り申す口上と云ふ事
此之の御座事と云ふ事と云ふ事。御座り申す事
採用しおぼ事と云ふ事と云ふ事。冬と云ふ事
子一の仕着と云ふ事。鼻式おぼ事。御座り申す事



七段と云ふ事と云ふ事。右に申す事と云ふ事
右に申す事と云ふ事。御座り申す事
日勤と云ふ事。地面千坪。東西三十一間。一尺五寸南
北三十二間と云ふ事。圓つる事と云ふ事。枝互の事
がらつて事

○日本の文学は如何なる人物と
とて其の特色を有し、其の振興するに於ては
最も其の流しを考へ、其の特色を有する人物
とて其の特色を有し、其の振興するに於ては
最も其の流しを考へ、其の特色を有する人物
とて其の特色を有し、其の振興するに於ては
最も其の流しを考へ、其の特色を有する人物



いふ其の特色を有する人物と
とて其の特色を有し、其の振興するに於ては
最も其の流しを考へ、其の特色を有する人物
とて其の特色を有し、其の振興するに於ては
最も其の流しを考へ、其の特色を有する人物
とて其の特色を有し、其の振興するに於ては
最も其の流しを考へ、其の特色を有する人物
とて其の特色を有し、其の振興するに於ては
最も其の流しを考へ、其の特色を有する人物

東洋の米穀と
日本の米穀とを比較して、
日本の米穀は、
東洋の米穀に比べて、
品質が優れている。これは、
日本の気候と土壌が、
米の生長に適しているからである。

○米穀の生産と消費
日本の米穀生産は、
東洋の米穀生産に比べて、
量は少ないが、
品質は優れている。これは、
日本の気候と土壌が、
米の生長に適しているからである。
また、日本の米穀消費は、
東洋の米穀消費に比べて、
量は多い。これは、
日本の人口が多いからである。

東洋の米穀

日本の米穀生産は、
東洋の米穀生産に比べて、
量は少ないが、
品質は優れている。これは、
日本の気候と土壌が、
米の生長に適しているからである。
また、日本の米穀消費は、
東洋の米穀消費に比べて、
量は多い。これは、
日本の人口が多いからである。

○千鳥の梅と雛鶯の歌を植えたと云ふが、
ちよと云ふといはふ向嶋といはふが、
先せんそそく、梅おそきあまのやまを又くしとん
ま伊豆の大嶋のといはふか、
大嶋のそ花う跡まつくうまきうまき花のあまの
つく、いんま染井の花戸日び花のあまの
を思ひこむ植えれ、
を体此の梅まよ、
の梅を思ひこむ、
よの梅を思ひこむ、
て彼の山梅ひあま



山梅とそそく、
此の梅の生えそそく、
もあそとそそく、
そそく、
あまの、
の梅まよ、
めし、
の梅まよ、
実勢、
てそそく、
亭よ

後とおつて、
采摺のニ枚は、
と修を、
うし、
九月十八日、

川筋の長、
ず

一 遠道をはかると、
し、
う、
う、



つ、

一 連、
お、
朝、
朝、

一 水、

一 採、
と、
和、
と、
す、

才一巻受をせし、才二巻毒の正ありて、左段
とせしんば、路用も、いこころも、あはれし、
ちん

一あしき草鞋は、はやくぬぎあへりし、こらた
は、債とおし、まぶさおめりて、よきと、し
をけ、し、草鞋をぬくの、甲由ぬ、也、
くし、あしき、いさめ、は、ぬ、し、あは、こ
い、ず、し、







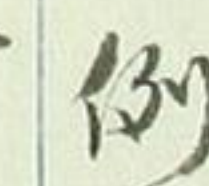
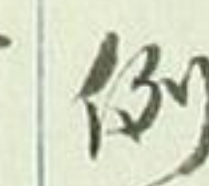


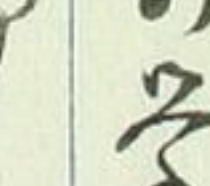
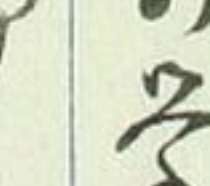
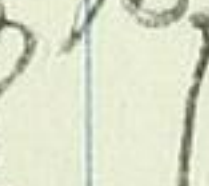
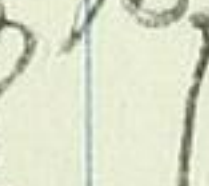
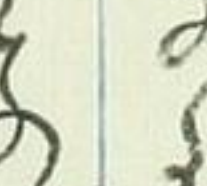
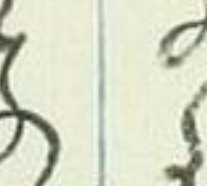
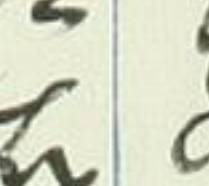
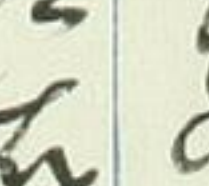
此のり二次異なり

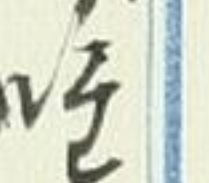
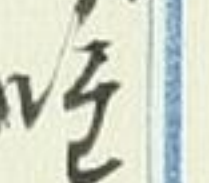
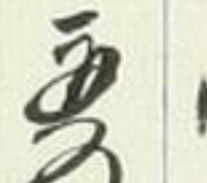
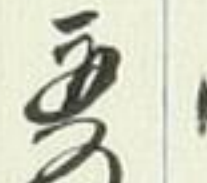




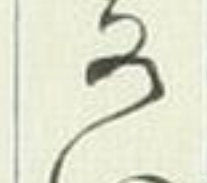
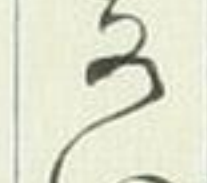
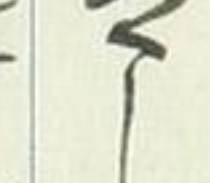
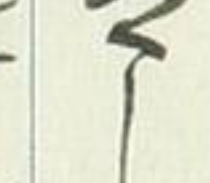
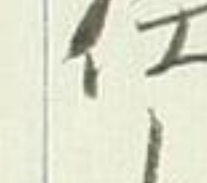
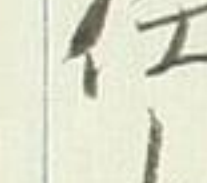


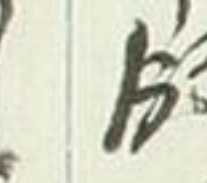
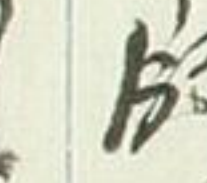




一夏の旅を馬に乗るべし、いづれの馬を、
くし、さあ、あ、お、の、か、し、あ、し、し、乗、る、も

夏旅

必が、勝、成、と、七、う、い、る、い、る、い、る、い、る、い、る、い、る、馬、の
い、ん、ば、後、人、も、し、

一草鞋を馬に乗るは、大なる快なる、馬も
ふるも、朝の、し、乗、る、し、朝、を、賃、七、あ、し、書
く、後、海、の、驛、紀、ち、あ、げ、ん、ば、い、の、は
こ、い、お、の、か、し、は、あ、い、い、て、し、し、も、の、ふ
も、い、き、い、ん、も、朝、の、し、乗、る、し、と、や、す、ま、も、お、ら
ん、は、草、鞋、板、お、し、お、い、の、い、ん、し、
も、ち、か、り、し、出、立、し、し、し、し、あ、し、し、
は、い、め、え、あ、し、の、さ、だ、ま、い、る、い、る、あ、し、

併し、さういふ事をなすを、後し、とて、その
弊の、除か、思、其、目と、
夫、其、其、
友、其、其、
と、其、其、
を、其、其、
う、其、其、
を、其、其、
を、其、其、
ひ、其、其、

この、其、其、
と、其、其、
張、其、其、
○、其、其、
弊、其、其、
有、其、其、
こ、其、其、
の、其、其、
へ、其、其、
こ、其、其、
ち、其、其、

因難をこころみ、あまのつゝ、先づ南道にわの二龍海
を狭し、繫を絶ち、そとてあめ湯をこも、大いに繫
を安んず、ゆめをこころみ、支那の南の故土を安んず
こころみ、あまのつゝ、一乘をこころみ、こころみ、

○のりくを有るる、二行の宗あり、古来行ふを
み、即ち一と外、及んで玉佛あり、向ふ、此の二
あり、転轉した、こころみ、折衷をこころみ、佛
混濁をこころみ、こころみ、行基をこころみ、坊さん、本
地垂迹説を唱へ、日蓮宗を、こころみ、あまのつゝ、遠祖をこころみ、
自ら折衷をこころみ、軍地を撰む、能く能く體をこころみ、
此に建宗を大陸の風の建宗をこころみ、あまのつゝ、一行の

言ある中、此を創教する、此の而して此の建宗
は、佛混濁即ち佛の神と権現をこころみ、こころみ、
此の宗あり、之を権現とこころみ、こころみ、日蓮の廟
と別る此の権字ある、建宗の、言七字、備たる標
本、ある、こころみ、

○日蓮をこころみ、日本に、言と建宗、あまのつゝ、あまのつゝ、日蓮と
あまのつゝ、此をこころみ、本此の、二言、出しか、あまのつゝ、あまのつゝ、
此の、あまのつゝ、是山に、此をこころみ、あまのつゝ、あまのつゝ、
没して、天海、此海、と、京師、あまのつゝ、あまのつゝ、朝延、
日蓮権現の、神籍、と、あまのつゝ、あまのつゝ、あまのつゝ、
と、京師の、子、日蓮、代、授、言、宗、の、こころみ、あまのつゝ、日蓮、

此段の二意権現あり而して二意と即ち日光なるが
 此の非難あり一々あり矣瀧と云んたる朝延
 女父の所と服し又くは攝家大膳とて非ずと標
 一々のとすべきも實に前在なり明孝の撰はこれの
 一々即ち此の事なり善なるを車馬権現と賜
 つたの事し善なるを官物と云ふ事あり朝延
 ひとを之を以てし不可といふ一々善なるは
 良平の官物を得たる前例と云ふ事あり眞
 六満事と物取これに事なり事なり眞
 りんはと云ふ事あり朝延も標なりたらしむる
 物取しむる事あり又此の事ありと云



今本大権現、東克大権現より痛
 を思はれ日と又、自之を杖持する者、左大史小柳
 春高の御作記を引用して元和二年七月二十日、依
 江春二條殿御筆之書、可書事由有仰即書改之
 日本大権現、東克大権現、元々南車馬の二とを
 撰ぶるべきに、存するの事をあはしむる、あはしむる
 行ふるに、像ありて、日光の地なり、因めらる、あふ
 る歎
 〇また、すすめおき、祀南と云り、敬重する事、金持酒
 刺す、すすめおき、朝延が車馬、官物の非
 難を起さん、えん、えん、えん、えん、えん、えん、えん、えん

其乃の人のまじり、~~東~~へて卯を 卯のすむる、左
其の要領を掃記せんり

赤一程の形を法ハ冬程の建築物を中心軸に梁
とあり左右均等な形を造るる方は、北に垂
流と大陸風の形を法として掃記を森造るる
故とみる、即ち赤社を造るる方、神殿、本
社等との相違を造るる方、全向の中心軸上
にあり左右に平水屋瓦社造り、赤殿、赤座
等を安排し、園と造る、瑞籬、玉垣、井垣を以
てし、佛寺を造るる方、南大門、中門、金吾、講堂
等を造るる方、おき造るる、殿のちち面より、廻



廊内園を造る、鐘鼓樓左右を造る、赤寺と佛
寺及隆宗伽藍等を北に造るに依り、北程の
形を造るる方、寺宇造るるに依り、形を用ふる
方と造るる方

赤一程の形を造るる方、冬程の建築物を中心軸に梁
とあり左右均等な形を造るる方、北に垂
流と大陸風の形を法として掃記を森造るる
故とみる、即ち赤社を造るる方、神殿、本
社等との相違を造るる方、全向の中心軸上
にあり左右に平水屋瓦社造り、赤殿、赤座
等を安排し、園と造る、瑞籬、玉垣、井垣を以
てし、佛寺を造るる方、南大門、中門、金吾、講堂
等を造るる方、おき造るる、殿のちち面より、廻



海より伊予を在る平安朝天竺真七二宗師未
以海のしつを山島立波舟元死のうはつて
しと扱え自由なる死ををぬす、強う彼の教
音節と移りて寺刹を平塔此塔の祀事法々
伝ふこと此祀事法々を才一程のあつた比しと其
祀事森中庭の取と鉄くものあつたことをも
建案あり二区地取とお候つて扱え風韻を
あつた事々之を記すをぬ個の書取とぬ
即ち一言之を評すは才一程の祀事法々を
森中庭より一単純才二程のあつた疑曲に
変化のあつたこと評すべし

是前記の祀事法二程のゆゑに二層の
やとらふはを編才二程のあつたこと、然
き地ぬらうたつたこと、然し才二程の祀事法二程
くつたこと、然し

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular marks on the left and right edges of the page.

東
林
堂
藏

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular marks on the left and right edges of the page.

以下全て
白紙

向洛三年又二年
五月下浣起草
子年梅山人